

希有人

希有

阿弥陀経には「釈迦牟尼仏よく甚難希有の事をなし」とあります。善導大師は念仏の人のことを「希有人」と言われ、親鸞聖人は信巻の初めに大信を讃嘆して「希有最勝之大信」とあげられました。

希有とは、一体どうなることでありましょう。希有とはまれにあるということ、滅多にないということであります。「甚難希有の事」滅多にない、まれな事、希有人と言えば滅多にないまれな人のことでもあります。

現代人の傾向

我等は希有のことをたづねています。街の中で電車と自動車が衝突します。すぐ黒山のように人がたかります。道端で一寸マッチをすって紙を一枚たきます。何だろうとすぐ人が集ります。これは人の好奇心であります。綱渡りを見て拍手するの、大地の上を歩いているよりも奇抜であるからであります。

現代人は疲れています。何にも飽いています。ですからいよいよこの何か変ったことを探ね獵っています。猟奇的という言葉がはやるのもそれであります。金のために書かれたナンセンスな大衆文芸が如何にこの現代人の猟奇心をねらっているとか。ただ興味本位の読み物が大河のように流れてゆきます。

だが仏教にいう希有とはそんな奇抜な存在を意味するのでありましょうか。

1

凡人の悲哀

「私の生活は何という平凡なものであろう。」

毎日同じ田に出て働き、同じ機械について働き、同じ役所で働き、同じ台所で働き、同じようにペンを動かし、同じように炊事と育児と洗濯をくり返し、同じように患者の手をとり、同じように電車を運転し、同じような教授をくり返し……… 何という平凡な仕事でおわることであろうか。大方の人にこうした倦怠があり、つまらなさがあり、平凡に対する愚痴がありますまいか。

中には華々しい政治の舞台に活躍して大臣となり、国家国民の中心となつて東奔西走、やがて東京駅で刺客のためにズドンと一発！ 何という非凡な一生であろう。あの大実業家を見よ。あの將軍を見よ、あの俳優を見よ。あの力士を見よ、思想家を見よ。だが釈尊をして言わしめた時、それ等を希有人というでしょうか。そして平凡な毎日をくり返す人を侮辱せられるではありませんようか。

現代一部青年の気持ちです。頭だけは先へ先へと行つて、実力も足も共に行きません。一つ仕事にトコトン力を入れて見るといふ熱意がなくて、享樂と、仕事の骨折れの少いことと、金の多いことと、そうしたことを追うてゆく。どこにも腰がすわらない。深く深く掘り下げたり、徹したりすることを忘れて、横へ横へと移つてゆく。何か破天荒の素晴らしさが待つてはいないか。しかし人生にはそう柵からボタ餅のようなことが待つてはいない。非凡の世界にいた人は、平凡なことに力を入れて

平凡なるものを我が上に生かしきることによって非凡になつたのであります。平凡人は非凡を一足飛に求めて、非凡な言葉や、出来事や、刺激になれて何を見ても聞いても平凡になつてしまうのであります。非凡な生活を求めるよりも、平凡な毎日に力を入れることによつて、非凡な何かが成就されるのではありますまいか。

平凡に徹す

はたして私どもの生活は、かくまでに平凡なものでありましようか。人々の毎日はつまらないものでありましようか。

私はささやかな存在であるかも知れません。しかし、私は私であつて、他の誰でもありません。自然は同一の事件をくり返しません。同一の人格を造りません。同一の個性を許しません。古往今来、人も事件も現象も全て同一なるものなく、絶対差別であります。して見ませば、親鸞聖人には聖人でなければ出来ない生活があり、釈尊には釈尊でなければ出来ない生活があり、お婆さんにはお婆さんでなければ成就することの出来ないことがあります。私には私でなければ出来ないことが与えられることを思つた時、私は私の今の生活に対して胸の躍るのを禁ずることが出来ません。昨日でもなく、明日でもなく、今の私に今なさねばならぬことを今成就しつつある自分を、尊重し喜ばずにはいられません。

釈尊は一生をかけて、甚難希有の事をなされ、私は毎日平凡なつまらぬ、ありふれたことをくり返しているのだという考えこそ、釈尊を一番歎かしめる考えであります。本年咲いた花も希有華であれば、昨年咲いた華も希有華であります。

2

今ここでこれだけの方にお会いして、こうしてお話ししていることでも、希有であります。昨日でもなし、明日でもなし、刻々に過ぎゆく今において、再びくり返すことは出来ません。一ぱいの茶を飲むことでも、今日汽車に乗つたことだつて、道を歩いたことだつて、一切が有難いことであり、希有のことでもあります。この畑でこの野菜にこの手入をしてやる、青々と葉が茂つている。このことが希有であります。釈尊だつて、曲馬団のような奇抜なことをされたのではありません。聖人だつて、子供でも口にするこの出来る、平凡な南無阿弥陀仏に徹することによつて非凡な業統を末代に残されたのであります。

日本の軍除は強い。なぜでしょう。平凡なことをくり返してうんと鍛えてものにしきるからであります。拳銃演習というのがあります。一二三、一二三と、銃の前に出して胸にひきつける三挙動の簡単なことを毎日幾百千回くり返します。そうして時々ある戦争に非凡な働きをします。平凡な毎日を緊張もせず、なげやりに、ぞんざいに暮すグウダラな人には、まさかという時、非凡な働きは生れて来ませぬ。

今の今、私にだけ与えられた仕事を完全にやりとげる、これが希有の事実であることとおぼゆる時、感謝と喜びがなくていられるでしようか。

独尊

「どうせ私などは、つまらぬ平凡人間ですから」

はたしてそうなのでしようか。この中を見渡します時、同じお顔は一つもありません。どのお顔だつて天下一品であります。平凡だと言えば全部平凡であり、非凡だと言えば全部非凡であります。おじいさんの顔だつてよく見ていけば棄てられない美があります。お顔が違うように心もちがい、個性も異つています。随つて希有の人ばかりであります。

然るに大方の人は、私はつまらないと思つてをります。それを「弊」というのであります。釈尊は天上天下唯我独尊をさとり、天上天下唯我独尊を生活し、天上天下唯我独尊を叫ばれたのであります。然るに凡夫は、常に天上天下唯我独慢になつています。この尊ぶかはりに、慢心にみちていることが、自分自身をつまらぬと思う心にするのであります。

誰も希有人であり、希有の生活をなし、希有の天地におりつつ、平凡なつまらぬ存在と卑下し、愚痴を言い、暗くなつているのであります。

そうした我等が南無阿弥陀仏にふれます時、大法の前に合掌して、彼岸に深い交渉を持つて来はじめますと、はじめて身の幸を知ります。誠に人生の尊いことと、自身の念々の生活の尊いことがわかつて来ます。

希有人

多くの人は、我を超越しておりません。我を超越するとは真に我にかえることでもあります。「汝自身にかえれ！」私がほんとに私になりきる、その時初めて我を超越するのであります。青が赤を羨しがつて青が赤になろうとすることではなくて、青が青になる、我が真に我を抱く、我が真に我の全部を承認する、青が青く光る、その独尊の世界が仏の世界であります。かく青は青で希有人となり、赤は赤で希有人となり、黄色は黄色に光り、白色は白色を放つ。かくの如き、希有人の集つた所が浄土であります。我等が念仏の世界に出された時、真にその差別のままが輝きあらしめられる。念仏の人を希有人と言ひ、その生活の根底である大信を、希有最勝之大信と言われ、甚難希有之事をなしたと言われるのであります。

我等が何時までも希有人となることが出来ないのは、仏を生かさずに、凡夫の我をつのるからであります。「仏法は無我にて候。」無我に仏心にかえる所のみ、希有人が生れます。我は仏の智慧光によつてのみ無我の信となります。